MINATO TOKYO

Bulletin みなとユネスコ

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY／MINATO UNESCO ASSN. 16-3,SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004／HIROSHI NAGANO PRES.
発行所／港ユネスコ協会　〒105-0004　東京都港区新橋3-16-3　TEL･FAX　03(3434)2233　発行人／永野博
Mail:info@minatounesco.jp　http://minato-unesco.jp

2016年9月1日発行　第145号

目　次

P1	巻頭言	P6－7	三田高校ユネスコ委員会の生徒さん来室
P2	新入会員を囲む会	P8	ゆかた着付け体験教室
P3	アゼルバイジャンの家庭料理	P9	ユネスコについて
P4－5	講演会「異文化の中で知ったこと、、、、」	P10	事務局便り ／ 編集後記

北極点への旅

理事　森村俊介

2014年7月15日から、ロシアの北極圏のムルマンスク（モスクワから北へ約2000km、北緯68度58分、東経33度05分）から、砕氷船「50イヤーズオブビクトリア号」に乗って北極点へ到達するという、11日間の旅に参加した。

3日目から氷をバリバリと砕きながら北極点まで進む。たいへんな迫力である。この醍醐味は他では味わえない。これを味わうために乗船するという人もいた。

食事はとても良く、毎日メニューが変わり、肉か魚かを選べる。バイキングもあり、おでんや蕎麦も出た。食べ過ぎて太ってしまった。毎日の講演タイムは、北極点までスキーで行った女性の話や、シロクマ、鯨、そして、通過するフランツ・ヨーゼフ諸島の説明など、多様で飽きなかった。ゾディアックボートに分乗して2つの島にも上陸した。

北極点・北緯90度に到達。船から降りて、そこで食事をし、志願者は冷たい北極海に入れることになった。西洋人10名ほどと、日本人メンバーの最年少の40代の女性2人が志願した。これは負けられないと思い、私も（マラソンをしているので心臓には自信があるので）海水パンツになり、水中へ飛び込んだ。膝から下がぴくぴくとなったのですぐに上がったが、しばらくは裸でいてもそんなに寒くならなかった。ウォッカは海へ入った人のみがもらえ、多く人から称賛してもらい、表彰状までもらったのは嬉しかった。

雪景色の中のシロクマは（北極点近くにはさすがにいなかった）素晴らしかった。アザラシ、セイウチ、ザトウ鯨にも会うことができた。

ここまで来るような人は、私以上に旅好きで、マニアックな人たちであり、世界中を旅しておられる。日本人50人の中では私はおそらく若い方から5番目であったが、年配の方がたの旅の経験話にはびっくりした。170か国訪れている人、国連加盟193か国全部の訪問を計画している人。南極には8割の人が訪れており、北極は2回目という人が数人もいる。

僻地の国だけを訪れるツアーがいろいろあるそうで、参加者も少なくないと聞いた。旅に熱中する日本人がいかに増えているかをあらためて感じた。

今回の旅には25人の中国人が参加していたが、全員が若い。50歳前の夫婦で子供連れが数組、つまり、家族で1千万円払うのは平気なのである。船内で行われた品物のオークションでも、日本人客が嫉妬するほどの競りぶりであった。また、この次の航海には、中国人が80人参加するとも聞いた。この旅に参加したことで、中国人の恐ろしいまでのお金の使いぶりや裕福さをじかに知った次第である。

新入会員を囲む会　・・委員会活動の説明と懇親会・・

日時：2016 年 6 月 1 日（火）18：30～20：30
会場：港区立生涯学習センター304 室　および港ユネスコ協会事務局

恒例の、この一年間に入会された方がたを歓迎し、活動への参加、協力を呼びかける会を開きました。3 名の新しいエネルギーを期待する会になりました。

◇ **永野 博 会長**の歓迎の言葉　「民間ユネスコ運動」は、戦後いち早く、日本で世界に先駆けて始まり、長年の実績は感銘深い。国際環境の変化の中で、常に「平和」を考えることが大切である。この協会では、会員の皆さんによって多様な活動が行われている。新入会員の皆様にはぜひ関心のある活動を見つけて、ご参加・ご協力していただき、ご一緒に協会をより一層活性化していただければ大変嬉しい。

◇ **菊地 賢介 副会長**の挨拶　新しく入会された皆様が新鮮な目で見て、「こうしたらいいのに」というようなご意見やアイディアを積極的に出していただき、楽しくご一緒に活動を進めていきたい。

続いて、各委員会の担当者が活動について説明を行い、参加・協力を求めました。

◇ **会員開発委員会**　「新入会員を囲む会」「MU A サロン」「新年会員懇親会」そして「大使館訪問」を担当。前回の大使館訪問先はアゼルバイジャン大使館。

◇ **広報ブレティン・インターネット委員会**　和文と英文、各々年 4 回発行し、全て活動の記録を掲載している。WEB サイトも担当。HP で世界中の方がたに見てもらえるようになっている。

◇ **国際学術文化委員会**　次の 3 事業を担当。テーマや講師について考え、話し合って企画、運営を行っている。
＊国際理解講演会　年 3 回開催。タイムリーなテーマで、専門家を講師にお呼びしている。昨年度のテーマは「戦後 70 年 歴史和解への道」「日本の美の心　伊勢神宮式年遷宮を撮る」「江戸の庶民文化を語る」
＊ディプロマッツ・レクチャー　駐日各国大使や大使館の方を対象に、日本理解を深めてもらうために、講師には英語でレクチャーしていただいている。前回の講師は藤崎一郎氏（前駐アメリカ合衆国特命全権大使）。
＊シンポジウム　年 1 回。前回のテーマは「気候変動時代の水害と水不足」で、気候、環境問題を取り上げた。

◇ **語学研修委員会**　東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向けて英会話講座の数と生徒さんを増やす予定。

◇ **世界の料理委員会**　田町駅近くの「みなとパーク芝浦」内のリーブラ料理室で、外国の家庭料理の紹介する事業を年 2～3 回開催。毎回人気を得ている。来る 6 月 5 日にアゼルバイジャン家庭料理を開催する。

◇ **みなと区民まつり委員会**　増上寺、芝公園一帯の広大な会場で東京タワーを望みながらの区民まつり。「みんなの広場」にテント出展。パネルを展示して活動を紹介し、ミニ・チャリティバザーを行っている。

◇ **ユース活動委員会**　留学生と交流する「UNESCO ユースフォーラム in みなと」を年 1 回開催。宇都宮市から留学生約 10 名を迎えて、慶応大学、玉川大学、ICU の各ユネスコクラブ、明治学院大学などの大学生たちの協力を得ながら、国際交流の機会を提供している。

◇ **日本文化体験教室委員会**　「ゆかた着付け」「抹茶」「書道」を数時間で体験してもらう事業。体験しながら楽しい交流の時間となっている。昨年は「日本の民話、踊りシリーズ」として「沖縄のエイサー」を企画した。

今回、前年の活動の写真をスライドで映したので、一層のご理解をいただけたのではないかと思います。

この後、事務局に移動しました。軽食を取りながら、全員が活動への参加のきっかけなどを含めて自己紹介をしました。

素晴らしい経験をお持ちの新しい方がたを迎え、力強く頼もしく思いました。有意義な時間を過ごすことができました。
3 名さまのこれからのユネスコ活動を期待しています！！

（会員開発委員会担当常任理事　小林 敬幸）

世界の味文化紹介

アゼルバイジャンの家庭料理

日時　2016 年 6 月 5 日（日）12 時 00 分～15 時 30 分
場所　港区立男女平等参画センター「リーブラ」料理室

講師　スーラ・ミルザエフさん（駐日アゼルバイジャン共和国大使館　一等書記官夫人）

スーラさんは母国では内科医として仕事をされていたが、外交官の夫・ロブシャン・ミルザエフ一等書記官とともに来日。自宅で母国の料理を教えほどの料理上手。二人のかわいらしい小学生の男の子のお母さまです。

アゼルバイジャンについて

初めのお国紹介は、夫君ロブシャンさんが流暢な日本語で説明してくださいました。

北にロシア、南にイラン、北西にジョージア、西にはアルメニア、トルコがあり、東はカスピ海に面している。シルクロードの通過点として、古くから多様な文化が共存、融合している。アゼルバイジャンの意味は「火の国」、拝火教（ゾロアスター教）の聖地がある。

1936 年以来ソビエト連邦に属していた。1991 年独立し、現在のアゼルバイジャン共和国になった。人口は 940 万人、北海道ぐらいの大きさ。殆どがイスラム教徒。独立後、産出する豊富な石油、天然ガスを活かして、著しい経済発展を続けている。

アゼルバイジャン料理の特徴

地勢からイランやトルコ料理の影響を多く受けている。干しブドウやアプリコットのドライフルーツとザクロを使う。調味料としてサフラン、タイム、クミンを用いる。羊肉もよく使う。

今回のメニュー

①王様のピラフ　特別な時に食する料理。

玉ねぎを炒め、ドライフルーツ（今回はアプリコット・レーズン・プラム）、食べやすくカットした羊肉、ゆでたお米を混ぜ合わせる。トルティーヤを敷いたケーキ型の器に入れ、サフランで色付けする。トルティーヤでふたをしてオーブンで焼く。焼き上がればオーブンから出して、器を逆さにすれば、トルティーヤにくるまれたピラフの完成。トルティーヤは薄く焼いたパンのようなもの。講師が前日、小麦粉で焼いて持参された。

②茄子とトマトのガーリック風味

茄子をオリーブオイルでいため、トマトもオイルでいため、茄子の上に重ねる。ニンニクをちらし、塩コショウで味付けして、鍋で少し煮る。

③バクラヴァ（菓子）

パイ生地（サワークリーム、重曹入り）をつくる。中身として、砕いたクルミ、砂糖と卵白の泡立てたものを使う。パイ生地の上に中身をのせ、上からパイ生地を重ねる。包丁でひし形の切れ目を付けて、オーブンで焼く。

④ザクロジュースとクルミのジャム　講師が持参され、料理と一緒に賞味させていただいた。

ご主人のお国紹介に加え、二人の息子さんが民族衣装を着てみせてくださるなど、ご家族で大サーヴィスして下さいました。この味文化紹介が　単なる料理教室にとどまらない醍醐味です。

オーブン料理が二つあるため、時間内に完成できるかハラハラでした。新しいスタッフ 2 人が加わり、また、港区補助事業なので教育委員会の竹藤係長もお手伝いに加わって下さったお陰で、異国情緒たっぷりのお料理が無事終了しました。

（世界の料理委員会担当常任理事　松崎加寿子）

2016 年度第 1 回　国際理解講演会

日時　　2016 年 7 月 13 日（水）　18：30～20：30
会場　　港区立生涯センター　101 号室

テーマ「異文化の中で　知ったこと　見えたこと　感じたこと」

～ 在オーストリア生活のエピソードから ～

講師　　**中島 章博 氏　指揮者**

講師プロフィル
1981 年フランス・パリ生まれ。指揮者・作編曲家。
早稲田大学理工学部、東京大学工学系研究科修士課程を経て、
2007 年から 2010 年までオーストリア共和国の
ザルツブルク・モーツァルテウム大学指揮科に留学。
日本で開催されたクルト・レーデル指揮コンクール 2012 にて、1 位なしの 2 位に入賞。
2013 年建築音響工学の分野で東京大学工学系研究科博士課程を修了し博士号取得。

講師は、「指揮を本場のオーストリアで学びたい」と、ザルツブルク・モーツァルテウム大学指揮科の試験を受けられ、2007 年の夏から 3 年間留学生活を送られました。「ここでは、日本とは文化や生活習慣が大きく異なり、日本を基準にすると考えられないようなことがしばしば起こりました。はじめは不便さや物足りなさが気になりましたが、慣れるとこれらも普通だと思えるようになり、逆に日本を冷静に見られるようにもなりました。」と語られました。

この留学生活の間に体験した様々なエピソードを、文化の違いも考察しながら、楽しくお話しくださいました。

[受験]
受験にいくために乗った列車から、ザルツブルクの方に虹が見え、「これで受かった！」と思った。
試験はペーパーテストと実技。ペーパーテストでは外国人は、なんの断りもなく電子辞書を使いながら受けられる。指揮科の実技は、数人の先生が並んでいる部屋に一人ずつ呼ばれる。早い人は 1 分位で出てくる。能力がすぐわかるらしい。30 人の受験生が 10 人にしぼられ、この年は 3～4 人が合格した。（注：翌年は 0 人だった）
学費は、有難いことに、とても安い。国が肩代わりして若い人を育てて、未来につなげようとしているからである。

[下宿]
はじめは先輩の家に居候（いそうろう）させてもらっていた。どのように探したらよいかわからなかったが、新聞に下宿情報が出ていた。旧市街に友人と 2 人で部屋を借りることができた。「何とかなるものです。」

[ビザを取る]
現地で一年間生活できるだけのお金が、口座になければならないという条件がある。書類を窓口に持っていくと、そこのおばちゃん（中島氏の表現です）に「スタンプが一つ足りない」と言われ、どうしたらよいかとちょっと、うろたえた。

ところが、その書類の発行元である郵便局に、誰でも押せるスタンプが置かれていることに気がついた。自分でスタンプを押して提出したら、おばちゃんは快く受け取ってくれた。それでビザはOKでした。

[ドイツ語教室]

授業は、初めからドイツ語しか使わない。でも、しばらくすると、なんとなくわかった気になった。

大学でフェスティバルがあった時、ドイツ語教室の日本人の仲間と、巻ずし（アボガド、マグロ、サーモンなど）を作ったら、大勢の人が群がってきて、大好評だった。

[自転車]

小さな町なので自転車に乗ると、5分で学校、30分で国際空港、40分でショッピングモールへ行ける。自転車専用道路があって、走りやすい。ただ自転車の値段は高く、安くても500ユーロ（その当時、日本円で1ユーロ、125円くらい？）、中古でも200～300ユーロはする。作りはしっかりしているように見えるが、重いし、タイヤはよくパンクする。荷物をたくさん載せたりすると、年に数回取替えなければならない。ライトもよく切れ、無灯が見つかると罰金を取られる。しかもザルツブルクの冬は寒く、－20°Cを下回る時がある。寒さのために自転車のキーが折れたこともある。鍵穴用のオイルがあるくらいである。

[文化]

音楽は技術だけではない。もちろん技術がなければ良い演奏はできない。例えば、チェコの田舎の街にあるオーケストラは、慣れない曲では音があまりきれいでじゃないが、チェコの作曲家ドボルザークやスメタナを演奏する時の素晴らしいことに驚いた。お国のものだから、この国の人たちにしか出せない音を出す。いかに表現することを主にしているのがわかる。

日本人は、技術的レベルは高いと思う。が、型に合わせようとして、音楽的に面白くない演奏をする人がいるようにも思う。しかし、日本人には現地の人が気づかない、細かなことに気がつくという、良い点がある。つまり、その国ごとに特徴があるといえる。

［平等］

日本の教育でいう「平等」は実は「不平等」ではないか。ヨーロッパでは一人一人に合ったものを与えるのが「平等」であると考えられる。人間は同じ人は一人もいないのだから。

ヨーロッパでは人が大事にされ、自己裁量で物事が進んでいる。他の価値観にがんじがらめにならなくてすむし、自分たちの見えない価値に誇りを持っている。

それが、音楽留学をとおして、感じたことである。

エピソードごとに笑い声を書けなくて残念ですが、はじめから堅苦しくならないようにと、気を使いながらのお話でした。

質問の時間には、建築音響工学についてのかなり専門的な質疑応答がありました。

「感動した演奏は？」の質問には「感情にのって、人間的であるもの」と答えられました。

指揮者になりたいという男子高校生の質問には、「すべての経験には無駄がない」「人間を作っていくことが、いい音楽につうじる」などとアドバイスされました。

参加者は、笑いを響かせるように指揮されたのか、素晴らしい音楽？　落語？を聞かされたのか、妙な錯覚に陥りながら講演が終わりました。

（担当：国際学術文化委員会
常任理事　磯部豊子）

都立三田高等学校・ユネスコ委員会の来室

～ユネスコ活動と、戦争と平和　について考える～

日時　　2016 年 6 月 14 日 16：00～17：15　　16 名の生徒さん、川口直弘先生、浅井藍先生
　　6 月 16 日 16：00～17：15　　14 名の生徒さん、川口直弘先生
会場　　港ユネスコ協会事務局

6 月、都立三田高校ユネスコ委員会の生徒さん 30 名が、2 グループに分かれて事務局を訪問して下さいました。
5 年前から始まったこの会合では、戦中戦後を体験した高井光子（76 歳）が講師役でお話ししています。

戦争の体験は楽しいことではありませんし、現実味のない高校生にどのように話せばいいのでしょうか。拙い話し手の私は自信がありませんが、何としても、「戦争をしてはいけない。平和を守ろうという一人ひとりの思いが大切」ということは伝えたいと思いました。

父は 1943 年（昭和 18 年）召集令状を受けて、祖父母、母、私達 3 人の子ども（姉 5 歳、私 3 歳、弟 1 歳）を残して、満州へ出征しました。故郷・和歌山市の中心部は 1945 年 7 月、爆撃機 B29 から投下された焼夷弾によって、焼け野原になり、1 か月後の 8 月 15 日に終戦。占領下で日本の民主主義の時代が始まりました。
私は 1946 年小学校に入学しました。食べ物、着る物、学用品、何もかもが不足した子ども時代でした。

1945 年の敗戦時、ソ連軍の侵攻により、満州（現・中国東北部）にいた日本人約 60 万人がシベリアへ強制抑留され、重労働・食料不足・極寒に苦しみ、約 6 万人が命を落とし、父もその一人でした。ロシアへの旅が可能になり、私は一人で 2006 年父の最期の地オレンブルグ市を訪れ、2009 年その地に日本政府によって慰霊碑が建ちました。

第二次世界大戦での日本人犠牲者は軍人・民間人合わせて約 310 万人とされています。いったん戦争が始まると、なかなか止められず、夥しい数の死者、負傷者を出し、その家族も長年苦しみ続けます。戦争は、勝っても負けても、深い傷が残ります。今後、もし、核戦争になれば、生物が生き延びることさえ危ぶまれます。

これまで毎年、生徒さんとの話の初めに、「戦争を体験したという話を、お祖父さんお祖母さんやお知り合いの方から聞かれことがありますか？」と尋ねてきました。いつも、「ちょっと聞いたことがある」という生徒さんが数名おられるくらいでした。私と同年代のお祖父さんやお祖母さんですから、戦争を体験された方がたが相当数おられるはずですが、苦しい思い出はご家族にも話してこられなかったのでしょう。

ところが、今年は、「お祖父さんやお祖母さんから戦争の話を聞いたことがある」という生徒さんが 4 人おられ、しかも、具体的な、はっきりしたお話を皆さんの前で話してくださいました。

「祖母は終戦直後、満州から引き揚げてきたそうです。」

「祖父は戦争に行き、終戦後、無事帰還したけれど、世間から暖かく迎えられず、辛い思いをしたそうです。」などです。

多分、事前に、戦争の体験の聞き取りをしてこられたのでしょうか。辛い、苦しい戦争体験を持つ方がたは、ご自分から敢えて、話したくなかったかもしれません。でも、お孫さんから尋ねてもらって、きっと嬉しかったのではないでしょうか。

身近な方がたから戦争の苦い体験話を聞かれると、平和への思いが強くなるにちがいありません。語り継ぐことの大切さを思います。

後日、下記の感想文を寄せて下さいましたので、先生のお許しを得て、掲載させていただきます。

1年1組　　柳場　祐美さん

私たちユネスコ委員会は、新橋にある港ユネスコを訪ねました。そこで、今を生きる私たち高校生は平和な世の中を創るために何ができるのかを考えるためにお話しを伺いました。

まずお聞きしたのは、第二次世界大戦中や敗戦直後の体験談です。当時の日本はとても貧しく、鉛筆やノートでさえ手に入らなかったとおっしゃっていました。私たちの日常生活がどれだけ幸せなのかがわかりました。また、家族が戦死した、ということを涙ぐみながらも話して下さり、家族が毎日そばにいてくれる温かさを感じました。また、戦前のお話もしてくださいました。戦前、選挙権は女性には与えられていなく、自分たちが望む政治家や総理大臣を選ぶということもできなかったようです。私は選挙権のお話を聞いて、今の日本は 18 歳以上の男女に選挙権が認められていることが平和な世の中を創り始める良い機会であると思いました。政治家を通じて国に自分の意見を伝え、自分たちが考え望む世の中を創ることが、戦争をなくし平和になるのだと思います。

より良い世の中、平和の砦を築くために小さなことでもいいから初めていくことが、今の私たちにできることだと思いました。

1年5組　　田澤　日緒里さん

私たち三田高校ユネスコ委員は、6月 14 日と 16 日に港ユネスコを訪問し、相談役の高井光子さんと対談を行いました。主にユネスコの理念や、高井さんの戦争体験について話していただきました。私たち一人ひとりの目をしっかり見て、落ち着いた口調で語りかけてくださり、とても心に響きました。

なかでも特に心に残ったのは、「日本は第二次世界大戦で世界初の被爆国となり深い傷を負った。が、その反面、我々も一加害者であるということを忘れてはならない。」というお話です。被害側と加害側、どちらも経験した日本だからこそ、どんな歴史にも目をそむけることなく向き合って、世界平和を希求する義務があると思います。

そのためには、私たち若い世代が、歴史を正しく理解し、学び続けることが大切です。そして高井さんのように後世にしっかり語り継いでいきたいです。

今回の対談を通して、今までどこか漠然としていたユネスコ委員としての務めをはっきりさせることができました。小さなことかもしれませんが、私たちにもできることはきっとあるはずです。「戦争は人の心中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない。」まずはお互いを広い心で理解し、尊重し合うことが世界平和への第一歩なのではないでしょうか。幅広い視野と豊かな心を持つことのできる人になりたいと強く思います。

（相談役、理事　　高井光子）

ゆかた着付け体験教室

日時：2016 年 6 月 25 日（土）13 時 30 分～16 時 00 分
会場：港区立生涯学習センター　203 号室

講師は、港ユネスコ協会の渡部俊子理事（さくら着物工房公認講師）がつとめ、会員 6 名が、スタッフとして参加しました。

企画内容

＊ゆかたの歴史の説明
＊着付けの説明
＊着付けの練習
＊ゆかたを自分で着て、集合写真撮影
＊自分で着たゆかたをたたむ練習
＊たたんだ後、参加者でお茶を飲みながら懇談

参加された皆様はとても熱心で、何回も繰り返し、ご自分で着たり脱いだりしながら、腕を磨いておられました。

「花火の時には、ゆかたを着て出かけたい」という華やいだ声が数人から聞こえました。

ゆかたを着て、皆様とても嬉しそうに晴れやかなお顔をしておられると見受けました。伝統衣装は、身に着けると即座に、その国の雰囲気になじませ、魅了してしまう魔法の道具なのだと思います。

皆様に喜んでいただけたので、スタッフとしてとても嬉しく思いました。

（日本文化体験教室委員長　笠原正子）

――文部科学省のホームページから――

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）とは

United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization U.N.E.S.C.O.は、諸国民の教育、科学、文化の協力と交流を通じて、国際平和と人類の福祉の促進を目的とした国際連合の専門機関です。（ユネスコ憲章前文より）

創設等　憲章採択　昭和20年（1945年）11月16日　　創設　昭和21年（1946年）11月4日

日本加盟　昭和26年（1951年）7月2日

加盟国数（Member States） 195 か国（2014 年 4 月現在）（他に、連携メンバー：マカオ等 9 地域）

事務局長（Director General）　イリーナ・ボコバ氏（Ms. Irina BOKOVA）

財政（2014～2015 年度：2 か年予算） 通常予算 653 百万ドル（内、我が国の分担金／7 百万ドル／10.834%）

ユネスコ憲章第 1 条（目的及び任務）

1.　この機関の目的は、国際連合憲章が世界の諸人民に対して人種、性、言語又は宗教の差別なく確認している正義、法の支配、人権及び基本的自由に対する普遍的な尊重を助長するために教育、科学及び文化を通じて諸国民の間の協力を促進することによつて、平和及び安全に貢献することである。

2.　この目的を実現するために、この機関は次のことを行う。―― 以下省略――

民間ユネスコ活動／公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟（National Federation of UNESCO Associations in Japan）

昭和 22 年（1947 年）に、世界に先駆けて仙台で始められた民間ユネスコ活動を続ける全国約 300 のユネスコ協会等の連合体的組織で、ユネスコ憲章の精神にのっとり、「世界の平和と人類の福祉」の実現を目的に、国民的ユネスコ活動を推進する非政府団体です。

同連盟では、各地のユネスコ協会、民間企業等と協力して、主に次のような活動を行っています。世界寺子屋運動、世界遺産活動、青少年育成活動、諸外国のユネスコ関係団体との相互交流、他。

事 務 局 便 り

【ようこそ　新入会員】　個人会員：金子 浩子さん、小林 真弓さん、鄭 壽善さん

【今後の行事予定】　（詳細は別途、チラシやホームページでご案内します）

☆9 月 7 日～12 月 14 日　初級英会話講座　毎水曜日 18：30～20：30　　秋期コース：全 14 回(¥22,000)
講師：マーク・マードック先生　　会場：港区立麻布区民センター

☆9 月 28 日～12 月 21 日　初中級英語講座　毎水曜日 18：30～20：30　秋期コース：全 12 回(¥20,000)
講師：笠原三郎先生　　会場：港ユネスコ協会事務所（JR 新橋駅烏森口出口から 2 分）

☆10 月 1 日（土）13：00～16：00　UNESCO ユースフォーラム in みなと 2016
「留学生との交流　～つながり始める僕らの New World～ 」
会場：リーブラホール（みなとパーク芝浦 1F）　参加費：無料　　定員：130 名

☆10 月 8 日（土）～9 日（日）みなと区民まつり　会場：芝公園一帯（8 日 11：00～、9 日 10：00～）
テント：みんなの広場の第 5 ブロック 34 番　活動紹介、ミニ・チャリティバザー

☆10 月 14 日（金）18：30～20：30　第 2 回国際理解講演会　　会場：港区立生涯学習センター305 号室
講師：オパール・ダン氏（幼児教育の専門家）　参加費：無料
テーマ：「バイリンガルの子ども達―グローバル社会の未来を担う子ども達を育む」

☆11 月 6 日（日）　12:00～15:30　「アメリカ南部の家庭料理」会場：港区立男女平等参画センター
「リーブラ」料理室　参加費：会員 1400 円　一般　1900 円

☆11 月 26 日（土）13：30～16：00　茶の湯体験教室　　会場：港区立生涯学習センター203 号室
参加費　500 円

☆12 月 3 日（土）13：30～16：00　書道体験教室　　会場：港区立生涯学習センター304 号室
参加費　300 円

【ご寄付、ご寄贈品など】　ご協力ありがとうございました　寄付者お名前（五十音順、敬称略）

☆熊本地震・子ども支援募金　合計 10 万 5 千円　日本ユネスコ協会連盟に送金済み。
¥10,000：今村孝子、大塚多恵子、高井光子　¥5,000：石山昌代、岩田早苗、岩田麻衣、江原音子、兼田徳子、友金守、永井美智子、永野博　¥3,000：磯部豊子、上野圭子、奥村和子、笠原正子、金澤由里、菊地賢介、松本洋、宮下ゆか里　¥2,000：西村アメリア、鈴木明美、葛西章江　¥1,000：山本俊介、秋山雅代、小林敬幸、足利扶美子、市川順子

☆ミンダナオ子ども図書館　送料¥10,000：永井美智子　衣料他：今村孝子、奥村和子、高井光子

【ご協力のお願い】　常時受け付け中です。事務局までお願いいたします。
＊日ユ協連・東日本大震災子ども支援募金
＊ミンダナオ子ども図書館へ　寄贈品 衣料品（除毛織物）新品・中古品（洗濯済）　寄付金（送料分）

港ユネスコ協会事務局　（火～金　10:30～17:30）
〒105-0004　東京都港区新橋 3-16-3　　TEL 03(3434)2300　TEL・FAX 03(3434)2233
E メール：info@minatounesco.jp　　ウェブサイト：http://minato-unesco.jp

―編集後記―

◆ 鎮魂の静寂と甲子園やリオ五輪の高揚感が同居した８月も終わり、秋の静けさが徐々に広がり始める時期となった。心理的開放感も影を薄め、意識も静かに内面に向く。しかし、世界各国の内向き志向だけは強まってほしくない。（須田康司）

◆ 7 月末から 2 週間、米国西海岸の姉妹都市でホームステイをしてきた高校生グループが元気に帰国した。地元市民が「内陸部の宝石」と自賛する落ち着いたコミュニティで、ホストファミリーに温かく迎えられ、異文化体験を通して得られた様々な「気づき」を語る若者たちの心には大きな収穫があった、と実感できて嬉しかった。（棚橋征一）

◆ リオ五輪が終わった。力を尽くして競う選手の皆さんに声援を送り、感動し、楽しませてもらった。9 月はパラリンピック。今年から、テレビとラジオでライブ放送することになったという（これまではダイジェストのみ）。パラ・アスリートの活躍を祈り、声援し、楽しみたい。（高井光子）